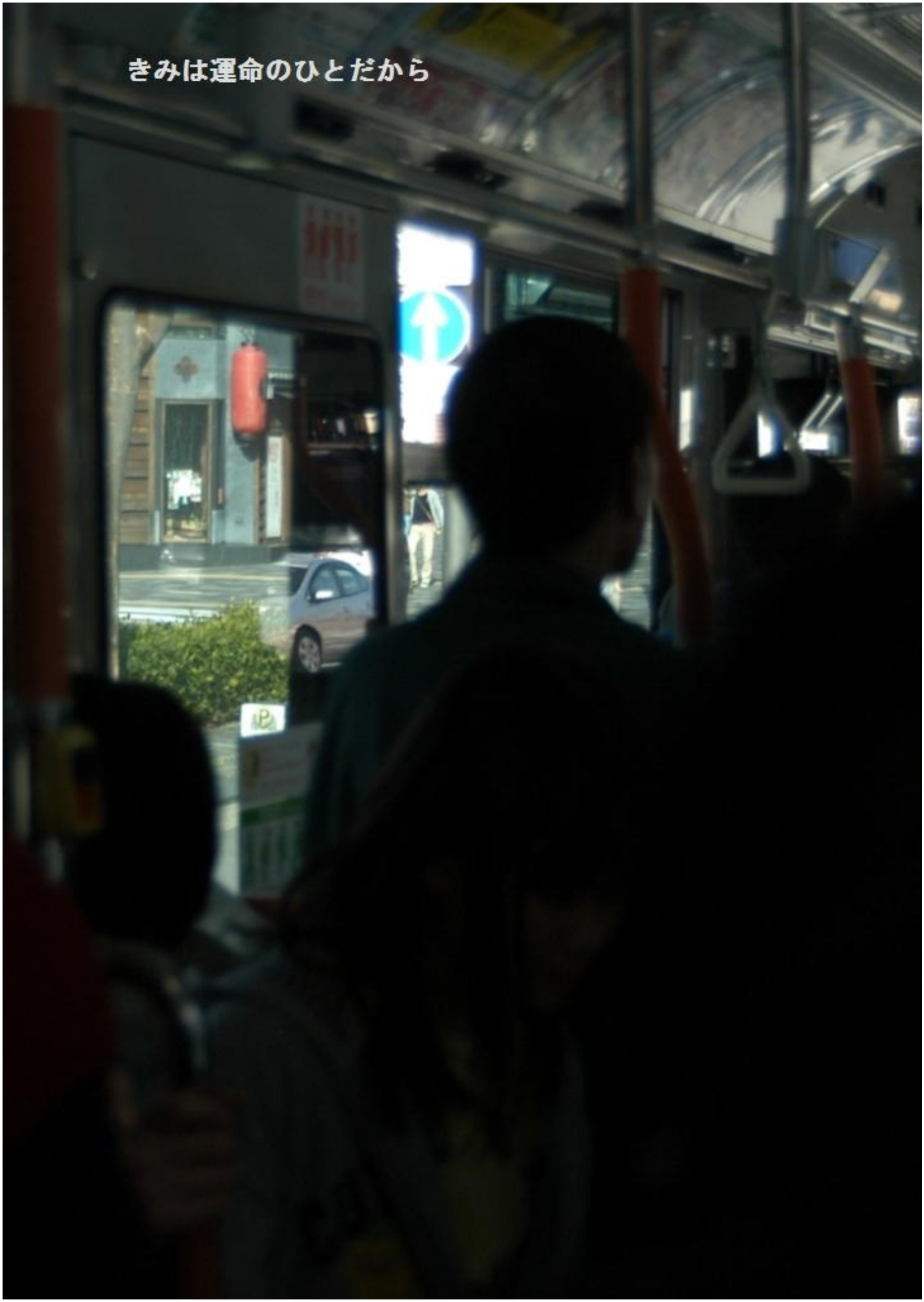
きみは運命のひとだから

私たちの性器はとても柔らかく、あたたかい。やさしい形をしている。でも
もしこれがとても硬かったら･･･？

　彼女の性器。氷みたいに硬くて、鍵穴みたいに緻密にできている。
　彼の性器もまた、骨のように硬くて、鍵のように複雑。

そんな中で、彼と彼女が愛し合いました。ツナガリタイと願いました。
交わろうとして、穴に押し込むのに、彼のは大きすぎて彼女に入りません。
彼女はとても痛がるし、彼も痛くてきつくて。
だって彼はカチカチなのに、彼女はカラカラなんです。
彼女があんまり辛そうで、彼はあきらめてしまいました。
「僕のカギに合う人をさがさなくちゃ。」
彼が去ってしまい、彼女は悲しくなりました。
「私とひとつになれるひとはどこ？
　わたしのこれにぴったりの人。無理をしないで入ってきてくれる人。
　私のたったひとりの人はいるのかしら。」

彼がまた一人の女の子を愛しました。
二人の気持ちが高まってつながろうとしました。すんなり二人は交わって、喜ぶのにどうでしょう。彼のは、彼女には小さすぎるのです。ぴったりじゃないのです。二人はとても残念がりました。だってつながってるのに、お互いを感じ合えないのです。
彼はその女の子のパートナーになることをあきらめました。この方法でお互いを感じ合えないなんて。お互いに気持ちよくなりたいのに。

そして、女の子もまた別の人を好きになりました。二人は愛し合って、ひとつになりたくなりました。でも神様は二人の思いを阻むのです。彼女は少し小さすぎて、彼は大きすぎるのです。
二人は近づきたくて必死でした。ひとつになりたくて、一生懸命押し込むのに、半分だって入りません。
「ダメ。無理だわ。入らないもの。」
彼女は泣き出してしまいました。悲しくて悲しくて涙は流れました。彼の体をぎゅっと抱きしめるのに、ひとつになれないのです。
「大丈夫だよ。」
彼は彼女に言いました。
「僕が、小さくするから。」
そう言って彼はナイフを取り出しました。
「削るよ。大丈夫。きみとつながりたいんだ。泣かないで。」
苦痛に耐えながら、彼は自分の性器のかたちを彼女の性器に合わせます。彼女の中に入りたい。彼女の運命の人になりたい。彼はそう思いました。
そうしてふたりは、やっと結ばれました。

不自然なことかもしれないけど、彼は彼女でなくては嫌だったから、彼女もそう思っていたから良いと思いました。それに、とて

も気持ちよかったのです。相手にぜんぶを与え合えるような感触が、とても気持ちよくて、あたたかくなれたのです。
でも、二人のした事でひとつ、運命が狂ってしまったのです。
彼の鍵の本当の相手も、彼女の鍵穴の本当の相手も、もうわかりません。

大問題となるか、と思いきや違います。
もうそれからは、皆がみんな、女の子も男の子も、自分の性器の改造にいそしみました。大人も老人も、相手に合わせて自分の体にメスを入れました。みんなが好きな人と正直に愛し合うようになりました。
たくさんの企業が性器改造業にのりだしました。そのうち、オールマイティくんやオールマイティちゃんになれる手術が開発されました。
「運命の人」の存在なんて、いまや過去のものです。科学や医学のおかげで人々の快楽の幅は広がりました。誰かとつながれることは、もう何でもない行為です。たやすく手に入ります。
でも時に人々は「運命の人」を欲しがりました。昔のことを懐かしがりました。目の前のよろこびにおぼれて、自分の体のかたちを失くしてしまったのです。

誰かとつながることが、何のための行為なのか。私たちにわかるのでしょうか。

ただつながりたいと思うことを止めることがどうしてもできないということだけ。

そればかりが私たちのなかにあるのです。